

初めの間新吉は熱狂して、頭が混亂して、矢張り郷里の警察でしたようにあばれた。喚きつゞけた。

同じ絶望が月日の外に嚴然としてゐる解がない。

新吉は同じものを食はされるのにも飽いた。

誰とも會話をまじえる事は出来ない。

観音經を暇にまかせてよんだ。

之さへ讀んでゐれば死ぬ氣使ひはないと言ふ信念が深くなつてゐた。

新吉は着物をバリ／＼裂いて、なはをなつて草履を造つた。

雨が降つたり、廣場で焚火をしたり、往來を通る人の話し聲が時々聞かれる。

「二斗ある米は、三斗ある」